

# シンポジウムのまとめ

司会 頼住 光子

近年、地球環境が急激に悪化している。例えば、今世紀最大の会議といわれた地球サミット（92年6月開催）で採択された、地球再生のための行動計画「アジェンダ21」の中の、解決すべき環境問題の膨大なリストを一瞥するだけでも、問題の深刻さが実感される。

この深刻な問題を解決するために、各方面において実に様々な対策が試みられているが、今、真に必要なのは、単に対症療法的に、個々の環境問題を解決することではなくて、自然破壊を生み出すもとなつた、われわれ自身の思考方法そのものを見直すことではないだろうか。今回のシンポジウム「自然と人間」の参加にあたり、私が抱いていたのは、このような問題意識であつた。

シンポジウムの報告にあたって、三人の提題者の発表をまとめておきたい。まず、小野木氏は、自然と人間とを媒介するものである「技術」に着目し、ギリシャ哲学研究者の立場から、プラトンの技術観を注釈を通じて明らかにした。氏によれば、プラトンは、人間は技術によって自然に働きかけるが、自然自身も、神の技術の産物であると捉えているという（ティマイオス）。そして、

人間の技術について、プラトンは、最善をめざす真の技術と、快樂しか問題にしない偽の技術（迎合）とを峻別する（ゴルギアス）。また、プラトンは、技術を、多様で無限なものを、関係付け統一して限定する営為と捉え、高く評価している（ピレボス）。

次に、小野原氏は、カント研究者の立場から、環境問題に対する、カントの人間中心主義的倫理学の有効性を検討した。氏によれば、カントは、一貫して自然を、人格によって自由に使用可能である物件として扱っている、という。この様な態度は、動物に人格を認め、湖や森にさえ権利を与える現代の環境倫理学とは、対立的なものであるが、しかし、カントの人間中心主義からは、環境破壊しか帰結しないかといえ、決してそうではない。人間という概念に、単に人格としての個人だけでなく、世代の担い手という意味を導入することによって、将来に渡って「維持可能な」自然を、未来の世代に対して残すという義務を、根拠付けることが可能となるのである。最後に、平山氏は、日本思想研究者の立場から、日本の思想的伝統を形作っている神道、仏教、儒教に共通して「日本的」自然観が見出されることを、関連文献を引用しつつ明らかにした。この自然観によれば、自然は、それ自身で神聖化された超越的なものであり、人間に求

められているのは、己を捨てて「場」としての自然に一体化することであった。氏は、このような「日本人好みの自然中心主義」からは、具体的な行為が導き出せない」と指摘し、日本人の自然観に批判的な立場をとった。

以上のように、各人の専門分野に基づいて発表が行われたのであるが、私自身の問題意識から言わせて頂くなから、私は、それぞれの発表から、環境破壊を生み出した、近代的な世界観、すなわち、人間が恣に支配できるものとして自然を捉え、また、計量可能で脱価値化された均質な空間として環境を捉える見方を越える諸契機について示唆を受けた。

小野木氏の発表についていえば、プラトンの技術論は、自然に対する人為の優越を説くという点では、自然を操作対象としてしか見ない近代的思考に通じるように見えつつ、しかし、その自然は神の技術の所産であり、また、技術は最高善に関わらなければならないという点で、自然を人間が一方的に利用するような在り方とは一線を画し得ると考えられる。(フロアからの氏に対する質問の多くは、プラトンの技術観のこのような現代的な意義にかかわるものであった)。

また、小野原氏の発表に関しては、均質な空間にアトムとしての人間が要素として布置されるという近代的の世界

観を越える際には、氏が世代の問題として言及した、時間の契機が重要であることを改めて考えさせられた。

そして、平山氏の発表についていえば、氏は、日本人の、自然を神秘化し、それとの一体化を重視する傾向を没主体的と批判されたが、私は、氏と同じく日本思想を研究する者として、日本の思想的伝統の可能性をもう少し評価したいとおもう。勿論、フロアとの質疑応答でも話題となった、自然尊重のはずの日本で深刻な自然破壊が行なわれたのはなぜか、自然を対象化しない伝統は高度なテクノロジの発達とどう関係するのかなど考えるべき課題も多く、また、丸山真男氏を始めとする日本人の没主体性に対する批判も耳を傾けるべき点が多いことは認めるが、しかし、自然の中に、人間によって決して馴致されることのない超越性を見出し、こうとする姿勢や、人間を独立した主体としてではなく、「場」の關係性において捉えようとする見方の中には、近代的な思考様式が見失ったもの、例えば、畏敬や共同性を取り戻す、一つの手がかりがあるように思われる。

以上、私なりにではあるが、シンポジウムのためを行なった。最後に、私の不十分な司会にもかかわらず、活発な討論をかわされた参加者に感謝したいと思う。

(よりずみ みつこ 山口大学)